

藤浦 清香

■訪問団体の活動やマネジメントなど、どの部分を日本のボランティアリーダーとして生かせるか

そもそも、「ボランティア」とは何か、「リーダー」とはどういうものなのか。

ボランティアは日本では無償の労働というニュアンスが強いが、本来は自主性を表す言葉である。つまりドイツ語で言えば *Freiwillige*（自由意思）で参加することを指す。

リーダーは、場の、またはグループの方向性があるべき方向に向かうようサポートし、責任を持つ役割であると私は考えている。つまりボランティアリーダーとしてという前提は、自主的に活動しようとする人たちをいかに巻き込むか、いかにまとめ上げるか、いかに満足させられるかという視点になる。

この視点から考えた結果、私が今回の研修で得たキーワードは「伝える」ということであつた。思いを伝えることで双方の満足度が高まるように考えたい。

そのためのポイントは以下の5つである。

- 1) 意図を伝える
- 2) 感謝を伝える
- 3) 独立する
- 4) 資金調達の手法
- 5) 環境教育

1) 意図を伝える

自分たちが何を目標しているのか、そのためにどういった活動を行っているのかを伝え続ける。身近な人ほど分かってくれているだろうという甘えが生じがちだが、丁寧に伝え、意識を共有する。

その際、心を動かす仕掛けを考える。視覚的に訴えるもの、イメージを伝える音楽、触感、足を運んだり体験したりすることによる実感など。

手法は会報・イベント・メディアなど。常に忘れられないようにすることを意識する。ドイツにおける統計で、忘れられずかつ煩わしくない直接伝達回数の目安は年に4～7回だというデータがあるが、日本でもその回数は妥当だろう。

会報の内容は、活動の報告、その活動がいかに実を結んでいるか、つまりどれだけ会員自身（すなわち、あなた）が世の中の役に立っているかなど。写真など交えながら *emotional* に（感情に訴えるように）伝える。

イベントは、さまざまな場面が考えられる。私たちの団体が力を入れているイベントは、県都に自然志向の人が多く集まるオーガニックフェスタとアースデー、それに地域で最大

の秋祭り（収穫祭）なのだが、これまでは存在を伝える程度にとどまっていた。積極的に興味を持ってくれる少数の人ばかりでなく、多くの方に意図を伝えるという観点からイベントへの取り組みを見直していきたい。

メディアは新聞が有効だろう。NABU の地域広報官ミヒャエルスキーさんは、週に1～2回は掲載されるようにしていると話されていた。その対象は日刊紙だけでなく週刊紙、業界紙など多種多様。多岐分野にわたる方が、様々な人の目に触れるからだ。紙媒体の掲載記事は自団体の信頼を高める上、活発に活動しているアピールになるので、有効に活用していきたい

2) 感謝を伝える

寄付をしてくれたことへの感謝、アクティブに活動したことへの感謝、その他協力してくれたことへの感謝を伝えることを惜しまない。直接目を見て伝えることがとても大事だが、ほかに会報で全体に伝える、感謝状やステッカーなどのツールを活用するなど工夫はいくらでもできる。

3) 独立する

NABU も BUND も、自分たちの活動は政党や宗教から独立しているのだといていた。だからこそ誰に対しても自由にものが言えるのだと。ひるがえって日本の NPO を考えると、そこに政党と宗教に加えて行政という要素も加わるだろう。助成金をベースに活動していると、行政の定めた意向に沿って（あるいは行政の定める規律の中で）活動を行わなければならない。趣旨に反することまではないにしても、最善の方法が採れないことは日常茶飯事だ。

2 団体の独立には数の力が大きく働いている。会員数が多ければ（つまり地域住民の1～3%ともなれば）、行政はその団体の意見を無視し難くなる。支える人が多いということはまた会費収入の多さにつながり、安定した運営ができ、信頼も増す。

私たちの団体ではこれまで、会員数を増やすことにあまり力を入れていなかった。だが今回数の力を実感したことから、帰国時から来年度に掛けて力を入れてみようと思った。

4) 資金調達の手法

ファンドレイジング研究所のヘルガ女史は、相手へのアプローチは友達に対するものと同じで、信頼を築いていくことが大切だと話されていた。自分自身が1) 正直で2) 透明で3) オープンであることが親密な関係になる第一歩だという。アメリカには寄付の文化もあり土壌が全く異なるので参考にしにくい事例も多いのだが、ドイツは「お金が友情を壊す」ということわざがあるほどお金に対する感覚は比較的日本人に近いようだ。

また、ファンドレイジングアカデミーのリットーショッフエル氏からは、具体的な30の手法を教えていただいた。すぐに取り組めるもの、日本で応用できそうなもの、将来的に考えていきたいものがそれぞれにあったが、個々の手法それ以上に、更に新しいアイデアを creative にだしていくこと、それらのアイデアを実践していくことが重要だ。

5) 環境教育

一口に環境教育といっても a) 子ども対象, b) 青年対象, c) 一般対象の3分野がある。

a) 子ども対象

私の活動内容にはここがいちばん大きく関わってくる。今回は幸運なことに、私立と公立という異なる運営形態の森のようちえんを見ることができた。そこで過ごす子どもたちの目の輝きや活動の様子、施設などに限っては、日本における森のようちえんのそれととてもよく似ていた。どちらの国でも森のようちえんの子どもたちはたくましく、かつ幸せそうだ。

b) 青年対象

FÖJ という環境ボランティア研修制度はとてもよい。次代を担う世代が環境に対する意識を高めるとい主目的の他に、関わる人や団体が活性化する、マンパワーの補足になるという点でも利がある。現時点で自分が取り組む課題ではないが、日本にも同様の制度ができれば、積極的に活用していきたい。

c) 一般対象

人の集まる場所に情報をおく、または情報を置いている場所に人が集まるようにする取り組みを見ることができた。特にマインツ市の環境情報センターにゴミ袋の配布ステーションという機能を持たせ、特に環境保護に興味のない人にも情報が目に付くようにしたのは素晴らしい工夫だ。またカラーリングや写真を活用したイメージング、触って感じる展示など、ここでも五感に訴える工夫が随所に見られた。

自然保護団体主催のワークショップでは、アクティブ会員の満足度を高めていることという趣旨が伝わってきた。例えば定年後の世代を対象とした自然大使制度は、高齢者の生きがいと子どもたちの自然教育、世代間交流にもなるシステムだ。

日本でも小中学校では自然教育に取り組んでいるが、子どもだけに伝えるよりも親の世代、祖父母の世代まで合わせて伝える方が効果は発揮されるだろう。

これらのポイント以外に、参考にしたい具体的な取り組みが数多くあった。日本では、あるいは自分の住む地域では、どのように応用できるかと考えるとワクワクする。「伝える」工夫に早速取り組んでいきたい。

■研修を通して、日本の環境ボランティアリーダーを支援するために、どのような仕組みが考えられるか。

この研修中、仕組みが機能している実例をいくつも見る事ができた。最終的には心が乗って初めて機能すると言えるだろうが、まずはその気持ちが結果にうまくつながるための機能として次の5つを提案したい。

- 1) ネットワーク
- 2) 情報共有
- 3) 広報
- 4) 研修
- 5) 専門的なデータ

1) ネットワーク

思考を同じくする人や団体と連携することが最も効果を発揮すると思われる。直接顔を合わせて話す時間の触発がいちばん大きいので会合の機会が年に1回。ほかにインターネットを介して互いの取り組み（活動の途中経過まで含めたもの）が見える媒体をフェイスシート形式でつukれないか。

2) 情報共有

主に次の3点の情報共有ができるとよい。ネット上でデータを共有できると、そのままツールを応用しやすく、よいのでは。

- a) どんな団体がどんなことをしているのか
- b) 具体的なツール（チラシなど）のデータ
- c) 支援に関する情報

3) 広報

前項2が内向けの発信だとすれば3は外向けの発信と位置づけられる。内容は主に次の3点。

- a) 環境に関する情報
- b) 各団体の活動の紹介
- c) イベントの案内

4) 研修

県レベルや地域レベルでまとまって、マネジメントやファンドレイジングなど各団体レベルでは難しい研修を組むと全体の資質向上が望める。

5) 専門的なデータ

科学的な裏付けとなるデータの提供、またはそのような調査研究を行っている団体との連携により全体にデータを共有すると信頼性が増す。

■全体を通しての感想

今回の研修に参加したことで得た収穫は大きく2つ、文字や写真からでは伝わらない情報を得たこと、一緒に参加した研修生およびOBとのつながりができたことである。

いちばん初めの、そして最も大きな衝撃となった事が森のようちえんでの質疑応答の中にあった。はじめはただの驚きだったが7日間を通してはっきりと感じられるものになったそれは、ドイツ人の自然観が日本と全く異なるということ。

少なくとも私の運営する森のようちえんでは、自然への畏敬の念、つまり自然は太刀打ちできない偉大なもの、怖ろしいものだという意識で接しているが、こちらの森のようちえんのアレクサンドラ先生は、自然は仕組みを知れば恐がる対象ではないという科学的な視点を伝えようとしていた。

また、日本人の感覚としては、人も自然の一部であり自然の中で生かされているという思想は一般的だと思うが、ドイツでは自然は人が守っていかなければならないと破壊されてしまうものだと言っていた。

それはもしかしたら、一旦すべてを破壊してしまったことに大きく由来する考え方なのかも知れない。地球規模での自然破壊が進む現状を鑑みると、未来の自然再生へ向けて有効な考え方なのかも知れない。それでも私は、日本ならどうしていけるか、日本人であればどういうことが有効かという視点からすべてを置き換えてこの研修の成果を活かしていきたい。

16期の研修生は物事を感覚的にとらえる人が多かったように思う。それは現場に出て子どもたちと過ごす活動が中心の人が多かったためなのだろうが、話を聞く限り、歴代の研修生とは少し異なる視点で見ていたように感じる。そうして視点や考えが偏りがちな状況の中、財団を背景に持つ桑野さんがいてくれたことはグループの幅を大きく広げてくれた。桑野さんの視点や質疑応答にハッとする場面が多々あったのだ。

トラブルがあった時どうするのかという問い掛けに対し、FÖJ担当のウルリケさんは「とにかく話し合うこと」といわれた。またNABUのミヒャエルスキーさんは、「意見の合わ

ない人とも話をする事で課題は解決する。グループの幅も広がる」といわれた。

もしかしたら、今後は 16 期生がボランティアリーダー会で異端児として幅を広げる役割を発揮することになるのかも知れない。自分の団体でも、地域でも、そしてボランティアリーダー会でも、いろいろな思考を持った人ととことん話をして力を付けていきたい。そして全体の底力を上げる一助にもなりたいと考えている。

最後に、貴重な機会を提供して下さった井下様はじめセブンイレブン記念財団の皆様、その背後にある全国の寄付者の皆様、通訳だけでなく文化的な背景まで説明しサポートして下さった小島様、多くの時間を割き学びをくださった現地の皆様、トップツアーの若井様と荒井様、みんなの気持ちを盛り上げてくれたドライバーのヴェルナーさんはじめ関わって下さった多くの方々。何よりも、市民活動を常に熱い思いで見守り、私たちを終始あたたかく率いて下さった事務局の小野様、そして環境という大きな課題に真正面から取り組んだ 16 期生の仲間々に心から感謝します。

この学びを決して学びだけに終わらせず、ひとつひとつ丁寧に実践し、必ず世界を牽引していくリーダーになることをここに誓います。

ありがとう そして **Vielen Dank. !**